

株式会社 東玉（とうぎょく）

創業者は医者との兼業

さいたま市岩槻区は、城下町あるいは日光御成道の宿場町として知られているが、人形の町としてもまた全国に名を馳せている。区内には160軒の人形店があり、頭師をはじめとする職人も約500人にのぼるといふ。人形作りに携わる人々は実に3,000人以上もいると言われ、伝統工芸を継承している。当社もその人形店の1社で、創業は1852年（嘉永5年）。既に、日光東照宮の造営で西国から招かれた人形師たちが、岩槻の町に根を下ろし活躍していた時代で、業歴からすると後発組となる。と言うのは、創業者の戸塚隆軒^{りゅうけん}は人形師ではなく、本業は医者だからで、後に人形作りの趣味が高じて兼業するようになったからだ。

隆軒は1809年（文化6年）に、出羽国（秋田県）の旧佐竹藩士戸塚文内の次男として生まれ、下野国日光の医師、和田玄参の養子となり、医業を学んだ後に岩槻で開業し、後に



医者であり創業者の戸塚隆軒



現在の東玉総本店ビル

藩医にもなっている。当社に残る文献に「岩槻城内の患家に喜びて行かざる家一戸も無し」との記録が残っているほどで、貴賤の上下なく等しく病人に接しては人々の苦しみを解き放ち、町の人から「日光医さん」と、親しまれていたという。趣味にしていた人形作りは、本職も脱帽するほどの女人はだしの出来栄で、ある時出来上がった人形を時の藩主に献上したところ、大いに褒められたという逸話が残っている。その際に、西国（京都）の人形師にも劣らないとして、「東国人形作りの王となれ」と励まされ、『東王』の称号を与えられた。しかし、「恐れ多い事」と何度も固辞したものの、「ご城主様からのご下賜を使わないわけにはいかない」と思い直し、「王にテンを加えて東玉」としたことで、現在の社名となっている。

ちなみに、時の岩槻城主が誰だったのかは、正確に記録として残ってはいないが、年代的に推測すると、おそらく初代大岡藩主の大岡忠光（江戸町奉行で有名な大岡越前守忠相の縁戚）から6代目の忠固（1852年に病死）か、7代目の忠恕（ただゆき、又はただのり）の

どちらかであったらろう。ただ、東玉の名前で人形作りを本業としたのは、まだずっと後の事になる。

明治に親子3世代で洗礼

2代目を継いだ健治郎も医者で、1840年(天保11年)の生まれ。父と同じく人形作りは趣味に留めながら、もっぱら人々を救う道に専念した。特に、同業の医者が決して往診には出かけない部落まで出かけて行ったほどで、親譲りの医道を全うしている。興味深いのは、時代が明治になってから、親子3代でキリスト教の洗礼を受けていることだ。記録によると、1885年(明治18年)のことで、世間では熱心な信徒として知られ、岩槻城址近くに『岩槻キリスト教会』を建設することになった際には、親子2代が資金面を含めて大きく貢献している。キリスト教に帰依したのは、隆軒が明治の初めに長崎に出向き、オランダ人医師から西洋医学を学んだことが影響したようだという。洗礼はその後4代にわたった今も続いている。

初代の隆軒が1892年(明治25年)に、84歳で他界した後も一家の奉仕活動は続き、特に健治郎は布教に熱心で、岩槻だけでなく近郷近在まで出向いてはキリストの教えを広めた。3代目の貞造も洗礼を受け、父と同じく信心深く当時では珍しく、日曜日になると商いを休業して教会で礼拝していたほど。ただ、医者として後を継ぐはずだったが、なぜか医学校の授業料を使いこんでしまい、結局卒業することができなかった。この3代目で戸塚家



隆軒が使っていた医療道具

の医者としての血筋が途絶えてしまうが、そうかと言って人形作りを本業とするまでには至らないでいる。

もちろん貞造も手先が器用で、人形作りの腕前も父に劣らず玄人はだしの技量だった。にもかかわらず、人形作りは副業的に趣味の世界に留め、当人は税務署の職員や文房具の商いなどの職に就き、自由気ままな人生を歩んでいる。転職を繰り返したにもかかわらず、あえて人形作りを本業としなかったのは、自分の技量の限界を悟っていたのかもしれない。それでも、人形作りに対する情熱は生半可なものではなく、自分の息子には人形師の道を歩ませることにした。1894年(明治27年)に貞造の次男として生まれた4代目の巖が12歳になると、地元で遠縁に当たる植松という人形卸問屋へ修行に出させている。

4代目、巖が人形店を開業

巖は2年ほど奉公した後、今度は東京・浅草の守千吉人形製造所に移り、年季の明けた20歳で故郷・岩槻に戻って「戸塚岩吉商店」

を設立、ここによやく当社の本業としての人形店がスタートした。1914年（大正3年）のことで、作号は「東都斎東玉」。それまで使っていた東玉に東の都を加えたもので、人形師としての巖の決意が込められている。また、巖は修行を通して、ただ単に人形師としての職人魂だけでなく、人形問屋で商いの手法を経験したことで商品の流通・販売まで熟知することができた。その経験が商売発展の糧となり、今日の当社の礎を築くことになったわけで、趣味の人形作りから本業へと脱皮させる契機ともなっている。

修行による経験だけでなく、巖本人が持つ潜在的な才覚も見逃せない。独立後の1923年（大正12年）には関東大震災が発生、さらには昭和時代初期にかけての不況の嵐、そして日中戦争から太平洋戦争までの大戦と、事業を営む者にとっては艱難辛苦の連続だった。それにもかかわらず、挫折するどころか事業を拡大させている。関東大震災後には徹夜を繰り返して人形を量産、岩槻近隣だけでなく東京や関西、四国、九州へと売り込みに出かけては販路を拡大。その努力が実って在庫の人形がなくなり、逆に品不足に陥るほどまでに売れたという。

1930年（昭和5年）の総武線（現在の東武野田線）開通時には、開設された岩槻駅前通りの拡幅工事に伴って、売りに出された老舗店舗を購入。当時の金額で1,000円と言う大金を払い、世間から失笑されたという逸話が残っているが、『駅前なら今以上の商売になる』との先見性は見事に的中、客足が飛躍的に伸び、職人を増やしてさらに人形を製造し

株式会社 東玉略年表

- 1809年(文化6年) 初代隆軒、旧佐竹藩士戸塚文内の次男として誕生
- 1840年(天保11年) 2代目、健治郎誕生
- 1863年(文久3年) 3代目、貞造誕生
- 1885年(明治18年) 隆軒、健治郎、貞造の親子3世代でキリスト教の洗礼を受ける
- 1892年(明治25年) 初代隆軒、死去。享年84歳
- 1894年(明治27年) 4代目、巖誕生
- 1912年(大正元年) 2代目、健治郎死去。享年74歳
- 1914年(大正3年) 岩槻町丹過で戸塚岩吉商店を設立し、人形作りを本業とする
- 1918年(大正7年) 後の5代目、健蔵が井野徳次郎の三男として誕生
- 1927年(昭和2年) 巖、岩槻町議会議員に当選。直売の宇都宮支店を開設
- 1929年(昭和4年) 3代目、貞造死去。享年66歳
- 1930年(昭和5年) 現在の東武野田線岩槻駅の開設に伴い、本店を駅前に移す
- 1933年(昭和8年) 中国・奉天に初の海外支店を開設
- 1939年(昭和14年) 戸塚芳子と健蔵が結婚
- 1940年(昭和15年) 6代目、隆誕生
- 1941年(昭和16年) 巖、岩槻雛人形組合長に就任
- 1948年(昭和23年) 有限会社戸塚商店に組織変更
- 1962年(昭和37年) 健蔵、岩槻雛人形組合長に就任
- 1964年(昭和39年) 株式会社東玉に組織変更
- 1967年(昭和42年) 健蔵、岩槻市議会議員に当選
- 1972年(昭和47年) 東武野田線岩槻駅前に東玉人形ビルが竣工
- 1974年(昭和49年) 巖が会長に、健蔵が社長に就任
- 1984年(昭和59年) 4代目、巖死去。享年90歳
- 1988年(昭和63年) 東玉人形会館竣工。健蔵が会長に、長男隆が社長に就任
- 2007年(平成19年) 健蔵、死去。享年90歳

て事業を軌道に乗せている。勢いはまだ止まらず、翌年には埼玉県商工部が主催した『朝鮮・満州市場調査団』に、岩槻の人形業界代表として参加。2年後の1933年（昭和8年）



中国奉天支社開設で赴任する社員との記念写真
=前列左から3番目が4代目の巖社長

には奉天に支店を開設し、人形職人と材料を送り現地で製造販売を行った。巖39歳の時である。これが岩槻人形の海外販売第1号となり、海外進出の先駆者としての偉業を成し遂げたわけで、業界内で囁かれていた『満州や朝鮮には馬族や匪賊がいて商売どころか生活もできない』という陰口を、この一事で一掃させた。

土産用にと米軍人が殺到

海外支店だけでなく、国内でも既に支店を開設している。鉄道の開通に合わせて本店を岩槻駅前に移転する以前には、既に栃木県宇都宮に支店を開設しているが、海外進出で自信を付けたことで店舗展開が加速し、太平洋戦争までの間に東京や埼玉などに8支店を開設した。ただ、戦争が激化すると人形作りに限らず、どのような商売も材料不足などから休業や廃業に追い込まれていく。不要不急品の人形は特に材料不足が深刻で、そんな時代にあっても巖は人形作りを諦めず、何とか材

料を調達しては細々と作り続けていた。

やがて終戦。時代の流れは、また巖に微笑むことに。進駐軍の米軍兵士たちが土産用にと、雛人形を買い求め出したのである。材料不足で代用品を使用した人形でも飛ぶように売れ、勢い商品不足となって価格が高騰し、経営を立て直すことができた。米軍人にとって、日本製の物なら何でも珍重されていたが、とりわけ日本の人形は喜ばれたという。売れなくとも戦時中から、せっせと人形作りを続けていたことで巖の店は繁盛し、その様を目の当たりにした同業が慌てて作り出そうとしても、肝心の職人がいない。巖は戦前から戦中にかけて、しっかりと職人を確保し育てていたため、同業との商戦に大きな差を生んでいたのである。

経営者としての才覚をいかんなく発揮したことで、経営は再び軌道に乗り出した1948年（昭和23年）、それまでの個人経営に終止符を打ち、『有限会社戸塚商店』を設立、法人組織として新たな一步を踏み出す。この頃、娘の芳子と結婚していた婿の健蔵が片腕となって巖を支え、その後の高度経済成長期を二



昭和40年ごろの岩槻駅前。左手2軒目が東玉総本店

人三脚で突き進む態勢が確立していた。健蔵は、地元の人形問屋『井野徳』店主、井野徳次郎の三男として1918年（大正7年）に誕生し、戸塚商店が有限会社化した年には30歳という年齢に達している。巖も54歳という壮年期で、二人の間は実の親子以上の絆で結ばれ経営に当たっていたが、人形の製作には巖が専ら関わっていた。と言うのは、人形作りには強いこだわりを持っていたからで、巖本人がデザインや衣装を考案し、それを各職人に発注。考えていたよう人形が完成しなかった場合には決して商品化せず、納得のいく会心の作品だけを販売していた。

今もそうだが、当時から人形作りは分業制で、頭師をはじめ胴・着せつけ師、手足師、小道具師に分かれている。当社のような問屋は、新しい人形を企画してどのくらいの価格で販売するか、また数量はどうするかを決めるのが仕事で、最後に各分業で出来上がったものを組み立てて完成品にするまでが担当。人形作りの各工程には、その道のプロが市内の2キロ圏内に存在しているのが岩槻の特徴で、これに人形の材料やガラスケース、段ボールなどのパッケージを扱う関連業者で成り立っている。現在6代目を継いでいる戸塚隆社長は「一つの人形を大勢の人の協力によって一体一体作っているが、良い品を安く売ることが一番大事なこと」と話し、「業界全体が協力関係の状態にある」と説明する。

経済発展で節句人形が復活

巖はそうした職人氣質の一方で、経営者で



上空から見た岩槻駅前と東玉総本店ビル1972年（昭和47年）

ありながらも、戦後の混乱期を一営業マンとして得意先を歩き回った。全国の人形小売店をリストアップし、自らの足で駆け回っただけにとどまらず、盛り場にも顔を出して人形を売り込んだ。果ては、新聞の折り込みチラシを使った宣伝広告にも乗り出し、自社製品だけでなく“岩槻の人形”として全国にアピールもしている。

経済発展とともに戦後生まれの子どもたちが成長すると、それまで戦争の混乱で忘れ去られていた“ひな祭り”や“五月人形”などの『節句人形』が復活。さらに、人々の暮らしにも少し余裕が出てきたことで、年中飾れる市松人形などの需要も増え、人形業界は活況を呈することに。いよいよ人形師として、最終仕上げの段階を迎える時期とも重なり、巖はかねてから秘めていた大事業に着手した。1964年（昭和39年）には、法人組織を『株式会社東玉』に社名変更していたことで、総本店ビルと人形会館の機能を併せ持ったビルの建設を決意。現在の東武野田線岩槻駅前の敷地約459平方メートルに、約3億円の建設費を投じて鉄骨鉄筋コンクリート造地下2階、

地上7階建て延べ約3,018平方メートルの『東玉人形ビル』を1972年（昭和47年）に竣工させた。巖、78歳の結晶である。

完成した東玉人形ビルは、地下の2層部分と5階に都市銀行の支店が入居したほかは、当社の店舗と事務所、そして人形文化ライブラリーで構成されていた。目玉は人形の全てが分かるライブラリーで、現在は4階に人形博物館として残っている。巖は、人形ブームが復活した時、全国各地から岩槻を訪れる多くの人々を受け入れる施設がないことを深慮していたという。『人形の町に相応しい建物が必要』との思いから建設に踏み切ったわけで、その意思は現在も引き継がれ、人形の展示のほかに工房など、人形が完成するまでを見学できる施設を開設した。

東玉人形ビルの完成から2年後、巖は健蔵に社長職を譲り会長に就任。一線から身を引いて、5代目健蔵に事業を託すが、既に57歳になっていた健蔵にとっては何の不安もなかった。巖からの教えを忠実に守りつつ、共に事業発展に尽力してきた自信には揺るぎがな



東玉総本店に展示している五月人形



雛人形を前に「これからも伝統と創造性を併せ持った人形を開発していく」と話す戸塚隆社長

い。特に終戦直後は、人形を売るのに苦労しただけでなく、天下の悪法とも言われた物品税の導入で、ぜいたく品として課税された莫大な税金支払いで、経営の危機にも直面しているが、4代目とともに乗り越えている。振り返れば、この物品税の課税が人形作りを本業にして最初の苦難だったが、その後は高度成長とともに5代目の経営は拡大していく。

健蔵は社長を引き継ぐ以前から、岩槻人形組合の組合長や岩槻市議の公職などにも就き、一方で高松宮様や現在の天皇陛下が皇太子時代に、岩槻市にお成りになった際には岩槻を代表して、お出迎えするなどの大役を果たしてきた。社長就任後も、後を継ぐ長男の隆現社長と一緒に、1988年（昭和63年）には東玉人形ビルの道路を挟んだ敷地に、『東玉人形会館』を建設、来館者に東玉の人形作りが見学できる工房を人形ビルから移設オープンさせている。健蔵はこの新館竣工を機に71歳で社長を退任して会長職に就き、その後2007年（平成19年）に90歳で長い人生を終えた。

時代に合わせた人形作り

隆軒から数えて6代目となる隆社長は、1940年（昭和15年）生まれで、23歳から家業を手伝っている。1963年（昭和38年）のことで、祖父に当たる巖から厳しく人形作りと会社経営を指導された。隆社長の時代は、高度経済成長期を経てバブルの崩壊、デフレ不況と国内経済は低迷していく。言わば良い時代に事業を手伝い引き継いだが、すぐに苦難の道のを歩むことになったわけだ。しかし、逆境の時代にあっても、代々伝わる家訓を守り通していることで、現在なお安定的な経営を維持している。例えば、信用第一という家訓があり、取引先や顧客だけでなく人形職人、社員に対しても徹底して守り続けてきた。初代の隆軒が患者との関係で信用第一を旨としていたが、人形作りを本業として商いをするようになって、さらに強固になり巖の時代には家訓として確立している。

特に信用問題に発展しやすい支払いの問題では、祖父の巖が職人上りということもあって、職人への手間賃を高め料金を滞りなく支払っている。取引先にも延滞せず期日



東玉総本店に併設されている見学のできる人形工房



国の有形文化財に登録されている東玉大正館
(旧中井銀行岩槻支店)

通りに支払っているが、隆社長は「高度成長期時代は材料の値上がりサイクルが早く、時には損をしていたほど」だと言う。逆に商品を納入する際には、注文をもらった時点よりも卸値が高くなっていたが、「信用にかかわるから」と言って損を承知で納めていた。家訓はさらに物を大切にする質素儉約や、社員より早く仕事に着手するなどの率先模範、さらには、その日にできることを翌日に延ばさない即日実行といった教えが残されている。

家訓を守りながら、伝統文化を受け継ぐ人形づくりを手掛けている当社だが、代表的な節句人形も時代とともに変化してきた。雛人形が良い例で、昔は15人飾りとか七段飾りが当然だったが、現在では三人官女が付いた3段飾りが主流。中には、内裏雛だけというものもあり、五月人形でもケースに収めたものや、飾る時期だけ収納ケースから出すものなど、今の住宅事情に合わせた時代を象徴する飾り方に変化している。それだけに、ライフスタイルに合わせた人形作りが求められるわけで、いかに時代のニーズに合った商品を作ってい

くかが経営を左右するカギとなる。

当社はこの節句人形が全体の9割を占め、残りは正月飾りの羽子板や破魔矢、あるいは市松人形などの日本人形などで、毎年6月になると来年用の節句人形の全国バイヤー向け卸売見本市があるという。人形制作では日本文化の伝統を伝えていくという大事な責務があるが、「伝統は守りつつ革新的な要素も織り込んでいかなければならない。“伝統の中の独創性”が当社の人形企画の方針で、他社にないオリジナルな商品で差別化を図っている」と、隆社長は話す。

その一方で、「節句の啓蒙が大事」とも言う。節句を祝う伝統文化を次世代に伝えていくには、何よりも啓蒙活動が欠かせないことを重視しているからで、「雛人形などは売る立場から、女性にとっては必需品ですよ、と常に訴えている」。また、伝統文化を伝えることと、啓蒙活動を同時に行うため、人形作りを指導する『東玉人形学院』を開設して、アマチュアだけでなくプロも養成。人形職人を対象にした『東匠会』も組織して、勉強会や情報交換会を開いて、技術の伝承と伝統文化の向上に努めている毎日だ。

こうした節句人形の普及に懸命な隆社長にとって今、実現したい望みがある。公共の人形博物館の建設で、「行政当局にお願いをしているところだが、今一步のところまで計画が練り直しになってしまった」と残念がる。人形の町、岩槻にふさわしい博物館の建設を一刻も早く実現させることが強い希望で、「そのためにも人形にまつわる年中行事をしっかりと実施していかなければならない」と話す。



総本店ビルから見た東玉総本店新館

「自分の仕事も大事だが、観光を含めた人形の岩槻という、ブランドも大きく育てていかなければ」と、老舗企業の経営者として今後も公私にわたって責務を果たしていくつもりだ。(文中敬称略)

会社概要

社名	株式会社 東玉(とうぎょく)
所在地	さいたま市岩槻区本町3-2-32
TEL	048-756-1111
FAX	048-757-3113
創業	1852年(嘉永5年)
資本金	5,000万円
従業員	47名(節供期 120名)
事業内容	雛人形、五月人形などの企画・制作および販売(全国卸販売、関東地区は直売店展開)、人形の博物館・人形学院の運営など
事業所	東玉人形会館/さいたま市岩槻区本町1-3-2 城町工房/さいたま市岩槻区城町2-2-34 木目込工房/さいたま市岩槻区本町1-3 直売店/藤沢店、横須賀店、宇都宮店、川口店、ふじみ野店 営業所/新潟営業所(新潟県三条市鶴田4-7-14)